

でも、その内容を変えてまた次の悩みが生じ、その悩みはエンドレスに続くといえる。

このように、仏教とカウンセリングは、人の心の悩みを解決するという意味では、共通点はみられるが、その解決方法は、仏教は人と仏との関係に依拠するのに対し、カウンセリングは、人と人との関係を拠り所とするなど大きな差異が認められるのである。

しかし近年、第四の心理学といわれるトランスパーソナル心理学において、従来認められなかった死の問題の解決である宗教体験すなわち神秘的、不可解あるいは一般には存在しないと映っていた現象に対しても、それは多くの人々の生活において、圧倒的に現実的でときには中心的なものであることが認められるようになってきた。言葉を変えて云えば、ここに宗教と心理学すなわち仏教とカウンセリングの接点が生れたと考えられる。

## 核燃料発電と仏教

### —— 新型動力炉命名をめぐる宗教と科学の言説 ——

工藤 英勝

新型動力炉とくに「もんじゅ」「ふげん」命名に関する仏教界および仏教学界の評価は、疑念や反対を表明していた少数者は除いて、おおむね好意的なものであった。

巷間で蔓延してきた曹洞宗の大本山永平寺とその要職者が、命名したいに何らかの関与をしたというのは、まったくの誤情報である。永平寺の貫首は命名発案者と面識すらなく、命名後の賛意が、貫首命名もしくは助言の「美談」として語られるよ

うになった。

新型動力炉三基の愛称命名の披露は、一九七〇(昭和四五年)年四月八日、大洗工学センター開所にちなんで、当時の動力炉・核燃料開発事業団(動燃)清成迪(きよなり・すすむ)副理事長が「新型動力炉の命名の趣旨」を発表している。この清成氏による発案過程にあつては、当時の動燃広報室長の証言等によれば、仏教学界および国文学界の重鎮とも事前に懇談・協議していたことが判明している。

清成氏は宮本正尊氏(日本印度學仏教學会理事長)や土岐善麿氏(国語審議会元会長)と懇談・討議しその結果、新型動力炉三基を命名している。関根氏も含む宮本氏、土岐氏いずれも浄土真宗の出身もしくは同宗派僧侶である。「常陽」の名は宮本氏からの当初提案では、阿弥陀如来の因位の菩薩名「法蔵」であつたという関根証言は驚きである。

動力炉・核燃料開発事業団『動燃二十年史』等には、命名の趣旨を「文殊、普賢の両菩薩は、知慧と慈悲を象徴する菩薩で、獅子と象に乗っている。それは巨獣の強大な力を知慧と慈悲で完全に制御している姿である。原子力の巨大なパワーもこのように制御され、人類の平和と幸福に役立つのでなければならぬ」と説明する。

国家プロジェクトによる新型動力炉事業において、政教分離原則違反が疑われかねない仏教菩薩尊像が堂々と掲載されているのは、異例中の異例である。それを実現にこぎつけたのは、発案者の清成氏の並々ならぬ熱意があつたからである。

新型動力炉の名称に関しては、その発表前後の違いはありな

がらも、日本仏教の要職者ならびに学界関係者も含め、科学と宗教との調和による人類幸福という文脈において、おおむね好意的な評価に終始している。

新型動力炉の命名発案者・清成氏は新聞取材や自著の中で「（核燃料発電事業に対する）行く手を阻む抵抗に対して、それを排除するあらゆる策を講じ、そしてそれを果断に断行する不撓不屈の大勇猛心が是非必要であります。疾きこと風の如く、侵略すること火の如く、あたりを焼き尽くす熱意がなければなりません」と繰り返し述べている。

新型原子炉の命名の趣旨説明で、清成氏はさかんに「科学と科学の両立」を強調していたが、実際の核燃料発電事業の推進の現場においては、「侵略」性を隠そうとしない。もちろん悪意ではなく、「善意」としてではある。ここで言う「侵略」とは、抽象的かつ暗示的ではあるが、国策としての核燃料発電事業は結果的には人間の肉体・生活・文化・歴史などの総体への「侵略」行為ではないか。

この侵略は軍事力を伴ったあからさまな暴力ではなく、経済行為を通して、きわめて「平和的」「永続的」「効率的」に実施された。しかし、この広汎な侵略に関わる者の倫理的な矛盾は合理化され、解消されなければならない。このようにして、核燃料発電の不合理性や倫理的な矛盾に対して、文明化、経済発展、資源有効利用への使命という「善意」が生じるのである。

事故後、仏教者が「反原発」「脱原発」等の善意によってどう糊塗し偽装しようとも、総じて人間に対する侵略の同調者であった罪は消えない。

## 第十一部会

無常のシンボリズム——震災から考える——

長崎 誠人

二〇一一年三月一日（金）に起こった東日本大震災以来、「無常」という語をしばしば目にしたり、耳にしたりするようになった。そこでは、無常観によって大きな災害や危機を受け止めるとともに、それを基盤として人々の連帯や共同性を再構築し、相克性から相乗性へと転換できるとされている。しかし、どのようなシンボリズムにより理解されるかによって、無常観はまったく異なるものになるように思われる。

古今和歌集、平家物語、方丈記、徒然草といった古典文学作品に表れている伝統的無常観は、たしかに大きな苦難を諦念によって受容することを可能にするものである。また生きとし生けるものすべては無常を逃れることはできないということから、他者との連帯、共同性の基盤となりうる。とりわけそれによって生と死が一如であることが認識され、死者への共感が呼び起こされるのであった。

ここで理解したいのは、このような無常観は仏教の教えにのみ由来するのではないということである。そこには、自然風土というわれわれを取り巻く事物をシンボルとして無常が理解されたときに得られた意味が含まれている。

ところが、現代に目を転じてみると、たとえばオウム真理教では「無常」の理解がまったく変わっている。漠然とした不安